



「理系のための研究生活ガイド 第2版」 坪田一男 [著]

筆者の所属する北里大学臨床工学専攻の学部生は、4年生の1年間、臨床実習と並行して研究生活を送る。卒業研究発表会、学会、研究会などで得られた研究成果を発表し、論文としてまとめる。この研究生活は、1学年下の3年生にはハードルが高く感じられるようで、3年次に研究室を選ぶという、研究生活を始める前の段階でまず戸惑う学生が多い。その原因は、研究に「堅苦しい」「難しい」というイメージがあるためではないかと考えた。そこで筆者は、学生に「研究はおもしろい」「研究を始める前、その事実を信じよう」とし、そんなときは、必ずこの一冊を手渡すことにしている。

この一冊とは、ブルーバックスの「理系のための研究生活ガイド」である。「研究はロマンあふれた知的冒険、マンガがおもしろいように、スキーが楽しいように、研究は同じくおもしろい」と著者の坪田先生は述べている。坪田先生は臨床業務と研究を並行して進める眼科医で、小誌の読者と同じ境遇にある。書籍のなかで臨床と研究を並行して行うことの大変さについても述べているが、その内容は現役の臨床工学技士には共感するところが多いはずである。「僕は何もないところからスタートした。お金はない、時間がない、設備もない」は、本書の冒頭に出てくる文章である。「では、どうやってスタートしたの?」という読み手の疑問に対する解決策は本文で述べられている。

本書では、研究のための時間管理法、体調維持術など生活面でのノウハウ、研究費を集める方法、パテントを取る方法など技術的なノウハウが惜しげもなく披露され、研究に必要なコミュニケーションの取り方、研究を楽しむため

の心構え、特にモチベーションの維持については多くのページが割かれている。前述の研究室の選択に悩む学部3年生に対して、「研究室はボスの人柄で選ぶ」「研究テーマを決める14の原則」の項目を参考に、研究を一生続けるつもりであれば研究はテーマで選び、卒業研究の1年間と割り切るのであれば指導者の考え方(に共感するか)でテーマを選ぶことを勧めている。本書のなかには、「テーマは流行で選ぶ」「教授の人柄で選ぶ」「早くトップになれるテーマを選ぶ」など、アカデミックな場で口に出すことにはとまどうけれども、キャッチーなフレーズが至るところに散りばめられている。

臨床工学技士として臨床業務と研究に携わっている本学の卒業生から、「先生に渡された本のなかで、学会発表の3原則と学会発表13の技術が役立った」と報告を受けた。学会発表の3原則とはパワーポイントを構成する際のルールの中で、「図を多用する」「説明文は短く、大きな文字で」「結論はわかりやすく」の3つである。発表方法については、「声を大きく」「聴衆の目を見て話す」「原稿を読まない」などがある。坪田先生が提唱された原則・法則であるが、筆者も同じ意見をもっており、研究指導に取り入れている。すでに学会発表を経験したことのある臨床工学技士であれば、論文執筆の5W1H、論文投稿の仕方、インパクトファクター一覧表などが参考になる。

全体として親しみやすい平易な文章で書かれているため、忙しい臨床業務や勉強の合間の気分転換、余暇の読み物としてもお薦めする。坪田先生の楽観的な考え方は、読み手を元気づけ楽しませてくれるはずである。

(北里大学医療衛生学部医療工学科
臨床工学専攻 酒井利奈)



講談社
272ページ
2010年2月発行
定価：本体940円(税別)